
えっ！？冒険できないんですか？

虹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えっ！？冒険できないんですか？

【Nコード】

N7718W

【作者名】

虹

【あらすじ】

前世の自分の善行により好きな世界に転生することになった主人公。冒険に憧れていた彼は、愛読している魔法と剣、ドラゴンが出てくる、ファンタジー小説の世界にするのだが、生まれ変わったのは人間ではなくて……

*挿絵をいくつか入れるつもりなので「見てみるかな」と言う人は挿絵表示「する」で、「見たくない」と言う人は「しない」でご覧

ください。

いろんな人の作品に触発され、書き始めたので、どこかでみた設定があるかも知れませんが。不愉快に思われたら、すいません。未熟な自分ですがよろしくお願いします。

11/11/17 (前書き)

しばらくしたら更新します。サブタイは最新更新日です。

世界設定

舞台

世界： エターナル

^{*1}時間を司る 時の神 と空間を司る 空の神 によって開かれた多重世界タイプの次元の一部。中のヒト系生物 人族、エルフ族、ドワーフ族 etc には「時の神 と 空の神 ^{*1}によって創られ、その4柱の子供によって管理されている」唯一世界として捉えられている。

作者および読者の皆様の住むココとは別の次元に属す宇宙のとある惑星。

地球の約3/5の大きさで自転、公転の周期は地球とはほぼ同じ。衛星は2つあるが一方は滅多に見えない。4つの大陸があり、それぞれな大きさは地球のオーストラリア大陸、アフリカ大陸ほど。

> i 3 3 4 0 1 — 3 9 4 4 <

大陸：リスフィア大陸

レセビア大陸に隣接したやや小さめの大陸。

大陸中心部に霊樹族の住む広大な森があり、魔力の恩恵の強い土地であるため森の周囲には4つの大国 スロキア国 シュベリエ王国 ターヒル商業国 スワ首長国連邦 がある。しかしその一方、いくつかあるその他小国も数は明確になっておらず、

どこの国にも属していない土地も多くあり、まだまだ発展途上の大陸である。

> i 3 3 4 0 0 — 3 9 4 4 <

*1 多重世界と唯一世界：一定の文明を持つ集合（例えば地球）全体を一個の世界となる。このとき上位神1柱、または、中位神複数により創造・管理されている1つの次元において相互干渉できる世界（たとえば、並行世界や他惑星）があるの多重世界、一つの世界で次元が完結しているのが唯一世界。

種族

《ヒト系》

人族：リスフィア大陸では最も多い種族。^{にんぞく}寿命は約60年と短い、一人の女性が一生に産む子の人数は5〜7人と多く、年々人口も増えている。汎用的な能力バランスであるがゆえに、個人の能力において他種族から抜きん出することはまずない。しかし仲間意識や組織体系の維持能力は強く、国などの集団をつくることにより大きな勢力となっている。また、創意工夫にあふれ多くの新技術をここ二百年ばかりで生み出している。結印魔術^{*2}や汎用魔石^{*}を開発したのも彼らである。

エルフ族：体内魔力総量は人族の魔術師（並）の数百倍、魔力運用にもたけている。一方体力は多くなく、人族の一般人にも劣る。（最近^{ブースト}は 肉体強化の印 を体に刻んで対処する方法が浸透してきている。）寿命は700年程度。個人主義だが、変化を嫌い他種族との交流をほとんど持たないため必然的に相互扶助するかたちとなり、現在の スロキア となった。しかし、国としてのまともには弱く、10ある氏族が個々の掟のもと、暮らしている。

ドワーフ族：寿命は400年程度。筋力が高く、背は人族の子供程度。体内魔力総量は人族の一般人とほぼ同等だが、^{エンチャント}魔術付加 を得意とする。また多くのドワーフが冶金や鍛冶などを生業とし、品質は高く ^{エンチャント}魔術付加 された武器・防具は非常に高額で取引される。

獣人族：人族の知能と獣の身体能力をあわせもつ。人族に獣耳や尻尾を付けたような姿の人型と獣が二足歩行しているような姿の獣化型がある。身体能力が非常に高いが、魔力がきわめて少なく、魔石無しでは魔術が使えない。ほとんどがレセビア大陸からの移住者。

《精霊系》

霊樹族：星と直接の ^{パス}魔力の系 を得ており、樹木でありながら高い知能をもっている。膨大な魔力により分霊を生み出すことで他種族との交流するが、一度に運用できる魔力の量は限られているので行動範囲も限られる（だいたい森のみ）。寿命は個人差が大きく数千年は生きるといわれている。

精霊族：精霊^{*3}が寄り集まり物質化した、いわば精霊の高位種のこと。
自身の魔力（＝体）の代わりに魔素を操り魔法を行使する。現在リ
スフィア大陸にはいないとされている。

*2 汎用魔石：精霊が宿り、系統の魔力を帯びた石である天然魔
石の代用として開発された、純粋な魔力のみを込めた石（主に水晶
や金剛石）

*3 精霊：空気中の魔力 魔素が集まって微弱な思念を得た
もの。性格によって火・土・風・水の系統が決まる。

その他

魔力・魔素：魔素は空気中の魔力のこと。魔力は科学的な実体はな
いが、大量に一カ所に集まると科学的法則に干渉する”歪み”を発
生させる。”歪み”は世界に付加を与えるため世界は起きないはず
の事象をおこし”歪み”を解消する。精霊が生まれるのもそのため
であるとされている。

《魔法》

魔力により、ことだま言霊を具現化させる一種の能力。

原初魔法：自身の体内魔力を声に込めて発して、言葉の内容を具現化させる。理論的には可能とされているが、伝説・伝承に残っているのみである。

精霊魔法：主に精霊族が使う。魔素にの流れを操り、言葉で意味づけることで自然現象を発生させる。

種族魔法：その種族が本能的に習得、慣習的に行使している魔法。一種の習性ともいえる。

《魔術》

魔法が使えない物が魔力を糧に望む現象をおこすため技術。自然の法則から離れた願いほど多くの魔力が必要。

陣魔術：現存で最も古い魔術。現在は儀式などの自然法則に関さない願いを実現させるときや、大規模な天災レベルの現象をおこす場合に使われる。円の中に文言や既定の文様を書き込んだ陣を媒介に世界おこしたい事象を示し、文言を読み上げ魔力を代償に世界に現

象をおこさせる。不発もままある。

結印魔術：約二百年前に人族が開発した印と 音の組合せによる魔術。

陣より細かい制御がしやすいが、威力は落ちる。

印は事象の系統を示し、精霊や魔素を集め歪みをつくる。一方音は歪みを願う形に書きかえ、発動させる。基本、魔力によって印を描き、魔力を印に流し込みつつ音を組合せて発することにより現象をおこす。しかし、最近ではあらかじめ特殊な方法で印を刻み、魔力を込め始動の音を発すだけで発動するようにする技術も開発されている。

（天界書房出版『下界の次元・世界図鑑』自動更新版』より一部抜粋）

11/11/17 (後書き)

「これは入れとけよっ!」と思う言葉とかあったら、お気軽にどうぞ。

ブログ（前書き）

今日は。

虹彩（ユーザーネーム）の虹です。超初心者ですがどうぞよろしくお願いします。

プロローグ

side：死神

皆さん、こんにちは

私、日本死神連盟（霊）の転生科に所属しております、スバル素晴と申します。

死神というと皆さんの多くが「ぼろいローブを着た骸骨が鎌を持っている」なんて姿をイメージされるのですが、そんなことはありません。むしろ、フォーマルな服要求されますよ、客商売ですから。まあ、「農夫」と言われる所以ともなっている鎌は標準装備ですが…。さらに言いますと、死神の仕事は「狩る」だけじゃありませんよ？「初期化」とか「振り分け」とか色々あるんですよ。

かくいう私（転生科）が何をしているのかといいますと、「特殊な転生をする魂を次の世界に送る」という事をしております。もちろん、転生書類の作成から本人への説明・説得、場合によっては他神との交渉も致します。先ほど客商売と言ったのはこの辺のことです。転生する先や理由は様々で、世界の選択肢は科学が発展したSFな世界から魔法があるファンタジーな世界までそれこそ無限にありますし、理由の方は前世の罰から書類ミスまで。最近ですと中々上位神の暇潰しというのが多いですね。

はあ、困ったもんです。私たち下位神の苦勞も知らず…。
…っと口がすべりましたが、転生者探しといきましょう。

さて、今回の転生者は、山口清君 16歳ですか。転生理由は……

「前世の善行による」……珍しいですね。

しかも、記憶の引き継ぎが可能ですね。

転生先は「本人の希望に1番近い世界」、転生後の種族は「未定」^{ランダム}ですか……。種族はわかりませんが転生先じゃ知能はある程度保障されますから、かなりの好条件ですね。

ああ、そろそろ時間ですし、お連れしますか。

> i 3 3 6 0 6 — 3 9 4 4 <

side：主人公

俺は山口清 16歳。まあ、いわゆるフツの男子高校生ってやつ。変わっていることといえば、冒険や魔法といったものの小説をよく読むことぐらいか。そういうもんに未だに憧れてたりもする。けどまあ、これは誰しも少しは思うことだろ？

こんな俺も高校生なわけだから、当然学校に行く。んで、今日もいつも通りに学校行き、授業を受け、帰っている途中なんだが、どうも嫌な予感がする。この手の予感によく当たるから、さっさと帰ろうと駆け出したとたん

キキィー、ドンッ

トラックにはねられた。

飛ばされて、地面に落ちるまでずいぶん長く感じて取り留めもなく
いろんなことを考えていた。「飛び出したのが悪かったかな」と
か、「死にたくねえ」とか、「予感 当たっちゃったな」とか。

だんだん意識が朦朧^{きうろう}としてきて、地面に落ちる衝撃もなんとかわか
るぐらいだった。

そんな中、俺が最後に見たのはトラックと野次馬、そして真っ黒な
鎌を片手に近づいてくるサラリーマン風の男だった。

プロローグ（後書き）

主人公は現時点で超ハイスペックな頭脳や身体能力はもってません。
好奇心と適応力の高い普通の？ヤツです。

第1話 説明

side:清

気がつくと、俺は何もない不思議な場所にいた。

まあ、俺がいる時点で何も無いって言い方自体おかしいんだが。強いていうなら、前後左右、上下の感覚がさっぱり掴めない真っ白なトコ。

「……………ここは、どこだ？」

俺は死んだんじゃないかったのか？」

「死にましたよ。」

何ともなくつぶやくと、背後から答えがあつた。

「はっ!？」

驚いて振り向くと、そこには黒い大きな鎌を持ち、真っ黒なスーツを着たサラリーマン風の男がいた。さっきまでいなかったはずのそいつはごく自然にそこにいて、俺の方を見ていた。

降ってわいたように現れたそいつを薄気味悪くかんじたものの、こんなおかしい場所ではなにがあっても不思議ではないと気を取り直し、現状を確認することにした。

> i 3 3 6 0 7 — 3 9 4 4 <

……ただ、俺 こいつ見たことあるような気がするんだよね

「はあ……、とりあえず状況説明お願いします。」

それと、あんた誰ですか？」

「ああ、自己紹介がまだでしたね。私こういう者です。
ちなみにここは”狭間”と呼ばれています。まあ、三途の川あたり
だと思ってください。」

そういつて、そいつはどこからともなく名刺を取り出して渡してき
た。

「……日本死神連盟（霊） 転生科 スバル 素晴？」

「はい。日本死神連盟（霊）は日本で魂の数の調整や転生の管理を
請け負っている死神の会社です。」

「……………」

死神ってことはアレか？俺が死ぬ間にみたのもこいつか？

どつりであんなもん（鎌）持ってるのに周りが騒いでないはずだよ。
っていうか、死神に会社なんかあるのか。仕事内容も服装も死神の
イメージからずれてるし、なんか役所の公務員みたいだな。戸籍関
係とかさ。

まあ、ある程度 現状もわかったし話を進めてもらうか。

仕事内容からして転生についてだろうな。でも、わざわざこんなト
コよばれたんだからなんかあるはずだよな。最近のネット小説みた
いに異世界転生とか冒険とかできんのかな。

…それはねえか。

「えつと、素晴さん？」

話からすると、俺 転生するんですよね？

なんでここにいますか？」

「ええ、そうですが ずいぶん落ち着いていらつしゃるんですね。それでですね、あなたがここにいるのはあなたの今回の転生が特殊なので、説明と質問が必要だからです。」

「特殊？」

「はい。説明しますのであちらへ」

そいつが指さす先にはまさに会社にありそうな応接セットがあった。いつ置いたのやら、ホントでたらめだ。

「山口 清さん、あなたは前世で相当な善行をしたらしく転生先を決めることができます。記憶の引き継ぎも可能です。」

「！！それって魔法がある世界とかもあるんですか！？」

「ええ。お望みの世界にいきます。もちろん、物語の中はストーリーが変わってしまうんで無理ですが、限りなく近い物ならあります。」

「マジ！？じゃあ、俺の読んでた『トワノウタ』っていう小説でも！？」

「はい、大丈夫です。記憶は引き継ぎますか？」

「はい！」

よっしゃー！まさか本物じゃないとはいえ『トワノウタ』の世界にいけるとはな。

魔法と剣の世界で冒険できるなんて夢みたいだ。

「記憶は転生したモノの自我がある程度できてから思い出すようになってます。

では、いつてらっしゃい。」

その声を合図に俺の意識は薄れていった。

ただ、魔法と剣の世界への転生を喜んではいでいた俺は気付かなかった。

「魔法が使えるようになる」とか「冒険できるようになる」とか、ましてや「転生するのは人間だ」なんて保障されていないってことに…

第1話 説明（後書き）

『トワノウタ』は全3巻＋番外2でRPG風な世界で主人公たちが
激闘、奮闘、葛藤する剣と魔法の冒険物語。

第2話 自覚

side：素晴

山口くんはずいぶん変わってましたねえ。

急に”狭間”なんか呼び出されて、転生の話なんかされたら普通の人はもつと取り乱したりすると思うのですが……。

まあ、敬語で頑張って話してましたし、好感持てますね。

さて、山口くんは何に転生したんでしょうか。

……

…… 霊樹 になってしまいましたか。これは予想外でした。

たしかに成長すると人間並の知能がつかますし、念話とはいえしゃべれますんで転生先の条件には合致しますけど、あんまりだろうし。

上司に報告もかねて掛け合ってみますか。

「 あっ、係長。素晴です。今回の転生者なんですが

はい、それで彼 その世界の樹木の類になってしまいましたで、どうにかありませんか？ はい？規則だから仕方ない？ですが…

はい。わかりました。」

仕方ない…ですか。

山口くんなら大丈夫な気がします。詫び状くらい送りますか。

カリ、カリカリ……

side : (元) 清

俺は、さわやかな風と木々の濃い息吹を感じて目覚めた。

どうやら、森の中のようだ。しかもだいぶ深い。

目線の高さからして俺自身は木の上にいるみたいだが……
体が動かせないぞ!?

なんでだ? 360°。きちんと見えるし、足元から水を吸い上げられているのもわかるぞ。

……ちよつと待て、俺。

「360°。」って真後ろまで見えてるつーことじゃねえか!
しかも、「足元から水を吸い上げられている」ってなんだ!?

自分の体を見ようと意識したとたん、一瞬の暗転。

そして、目の前には淡い黄緑の光を纏った大樹が在った。
「これが俺か。」

ふと出た言葉だったが不思議と確信が持てた。

そうしてしばらく大樹を眺めていると、頭上から白い紙切れみたいのが落ちてきた。

手に取って見てみると、封筒だった。

…あ、取れるんだ。っていうか、俺の手透けてるし！なんで？

考えてもわかりやしないから、封筒を確認することにした。

「えっと、『素晴』さん？

ああ、死神の人か。んでなんだって？ 山口くん 君の転生先は

ランダムで“霊樹”になってしまいました。霊樹は分霊（人型・動物型）を出せますが、行動範囲がほとんどその森に限られてしまいます。しかし、こちらの規則で転生先の体は変えられません。申しわけありません。 か。」

ってなわけで皆さん 俺 山口清は木（なにやら普通ではない）に転生しました

……アレ？ 俺、もしかして冒険できないんですか？ orz

第2話 自覚（後書き）

主人公超困惑中。希望、潰える。。。か？

第3話 靈樹

side：清（仮）

「うーん。」

なんで俺がうなってるのかてえと、動物方の分霊になれないんだ。素晴さんからの手紙を読み終えた俺は自分がいま人型の分霊になってるんだと気付いた。違うかもしれないけど、手紙とったときの手が人のそれだったし、透けてたし。それで能力把握のためにも動物型になろうとしたんだ。けど、なかなかどうしてこれが難しい。人型になったときは無意識だったからな。

「どうしたもんかなあ。」

「ふおっふおっふお。目覚めたたん人型になったと思ったら、何を悩んでおるんかのう。」

つぶやいたら頭に声が響いてきたから反射的に振り返ったら、爺さんがいた。

しかも俺みたいに透けてる。靈樹族か？とりあえずきいてみよう。

「…どなたでしょう？」

「しかも発音する（しゃべる）ときた。だが、このへんの種族の言語ではないのう。すまんが、念話でたのむぞ。なに 強く念じればいい。」

ああ、靈樹はしゃべんねえのか。手紙にもあったな、念話……こう

か？

〃 誰？〃

〃 ん。最初はそんなもんじやろうて。〃

念話の成功に喜ぶとともに敬語でないことにあせった俺だったが、
なんか大丈夫らしい。

〃 で、わしの真名は*****じゃが、そのようすだとわかるまい。一応 霊樹の長 とほかからはよばれておる。〃

霊樹の長 ！！2巻のか？俺 もしかして物語に介入したりでき
んのか？

とゆうか真名ってなんだ？聞き取れなかったぞ
困惑する俺を見て、爺さん もとい 長はつづける。

〃 真名は その存在の名前 みたいなものじゃ。おぬしにもあるは
ずじゃ。〃

〃 俺は 山口清 だ。〃

前世の名をいつてみたがどうもしっくりこない。
そんな気持ちを知ってか知らずか長はいう。

〃 それも名前じゃが、それとはまた質の違うモノじゃ。…最初から
人型だったのはその名があったからかの。にしても、真名がない
ということはないじやろうし、困ったのう。樹にもどれないうえ、
力も弱まるぞい。〃

「じゃあ、どうすれば？」

念話には慣れてきたが、真名がないとまずいようだ。

「思い出すほかないのう。とりあえずはキヨシとしてその姿でここになれていけ。先達として手助けぐらいしようぞ。」

「！！　　よろしくお願いします。」

ここでは、右も左もわからない俺は、とりあえずは長にいろいろ教えてもらいながら生活することにした。

side:長

十年ぶりの新入りは何とも奇妙なヤツだった。

目覚めたかと思えば練習もせずに人型の分霊をだしおった。わしだって小動物からいくつかの段階を経て一年がかりで人型をだしたとゆうに。

しかも、主人格が分霊にあるようでわしの知らん言葉（後で聞いた

ところによるとニホン語らしいのう）でしゃべっておった。なにやら悩んでいるようじゃったから（念話で）話しかけると、最初こそ戸惑っておったがすぐに慣れて話が聞けたぞ。

本人いわく、真名はわからないが名を「ヤマグチキヨシ」といい、「前世の記憶」があるらしいのう。しゃべっておった「ニホン語」とやらや名、そして人型の容姿も前世の記憶によるものだというこつじや。

悩んでいたのは「動物型の分霊になれんかったから」らしいのじやが、真名を思い出さんことにはのう。

キヨシはこの十日程でこの近辺の地形や国についての知識をあらたおぼえてしまいおるし、他の者と比べて優秀で将来が非常に楽しみなんじやがのう。

そういえば、あとひと月ばかりでエルフの祭じゃった。エルフの長や巫女がくるじやろうから知恵を借りてみようかの。エルフらは魔術や呪い（まじない）に強かったはずじや、いつも貸すばかりの知恵じやたまにはよかろう。

リン殿は元気かのう。楽しみじやのう。

第3話 靈樹（後書き）

ちよつと説明です。

まず、人型の分霊について。長は一年といっていますが普通の靈樹族は4、5年かかります。

つぎに、大地の巫女 について。エルフ族は樹木と精霊の中間な靈樹族を敬いその長をあがめています。その恐れ多い長と言葉をかわすのが 大地の巫女 で、だいたい160歳で役目につき700、800歳までつとめます。

ちなみに、靈樹族はエルフ族のことを「他のあまたある部族の中で比較的、近いもの」ぐらいにしか考えてません。

そんでもって、「””」の中は日本語です。一応転生ものなので自動翻訳的なオプションはありません。念話では”思い”をそのまま伝えるんで使用言語が違って通じるってことで…

リンさんは次話で出す予定です。

第4話 再確認（前書き）

ちよつと短いですが、どぞ。

第4話 再確認

side：キヨシ

こんにちは。

霊樹になって一カ月ちよいたった、キヨシこと山口 清だ。

んで、一カ月ちよいも俺が何してたかってえと、勉強してたんだ：

orz

しかも、前世の記憶っていうか人格も受け継いでて、ある程度の知能と理解力（普通、自我が目覚めたときは人間でいう2、3歳の知能らしい）があるからやたらに詰め込まれた。まず、この世界およびこの森の常識。それからこれは、俺が頼んで教えてもらったんだが周辺地理と近くの国について。最後にことば。ことばは、念話（すでに敬語もばっちりだ）があるからいらねえと思ったんだが、他種族との交流のときに発音^{しゃべれる}できるヤツがいると便利なんだと。で、日本語しゃべってた俺に仕込んでこうってことになったらしい。

ちなみに教えられた知識は概ね小説のとおりだったけど、獣人帝国ナフターレとかなかったし、未開拓地が多かったから『トワノウタ』より前の時代なんだろう。

一応 整理しておく、この世界は エターナル といい始神^{しじん}と終神^{しゅじん}によって創られたとされている。この2柱は上位神で上位神はあと2柱、中位神は5柱、下位神が4柱いるけど割愛。

んで、エターナル には4つの大陸があるとされているけどこの森がある リスフィア大陸 と隣の レセビヤ大陸 しか見つか

っていない。この森は リスフィア大陸 のほぼ中央に位置し、西にエルフ族の国 スロキア がくつつくようなかんじであって、南と東の少し離れたところに人族の国 シュベリエ王国 と ターヒル、北にドワーフ族の国 スワ首長国連邦 がある。スワのさらに北には ロミューラ山脈 があり、そこからスワの西と森の中心部を通りシュベリエとターヒルの間を海へと川が流れている。（川には共通した名前はないらしい。）

それから、ことばは各国、各種族に特有のものがあるが公用語は大陸共通語が使われている。当然、俺が勉強したのもそれ。

……………うん、ざっとこんなもんだな。

覚えんの結構ハードだった。高校受験よかましかけどよ。

ん？長から念話だ。

「はい。 わかった。今行きます。」

何でも明日、他種族が来るから準備だつてさ。

ま、じゃあな。

第4話 再確認（後書き）

地図はそのうちその他設定とともに出す予定です。

第5話 対面

side：キヨシ

今日、噂の他種族が来たんだ。

しかもその種族は 見た目 人間とそう変わらなくて耳だけが人間より長くてとがってる そう、エルフだったのだ！

最初の異種族交流の相手がエルフってなんか感動しねえ？

いや、もちろん動植物、うさぎ（角付き）とか花とか狼（赤紫）の意識も念話で読み取れたけど……なんか違うだろ？

まあ、そんなことは置いといて今日来たエルフの話をしよう。

今日来たのは 大地の氏族 という祭事や神事を司る氏族の人々で、この氏族の長でもありエルフの長でもあるトールズさんと 大地の巫女 のリーンさん、巫女見習い兼巫女の従者のサリサさんとミユラさん、あとは荷物持ちの男性衆で計10人だ。

全員 超美形。男どももむかつくぐらいイケメンだった。

リーンさんは見た目70歳ぐらいだったけど、まさに「綺麗に年をとった」って感じで若い頃はさぞかし美女だったんだろう。

ちなみにほかの人たちの見た目は、トールズさんが40代半ば、サリサさんが13、4歳、ミユラさんが16、7歳、男性衆が20才前後かなって感じだな。

ただし、成人の儀式後エルフは人間の8〜10倍かけて成長するか実年齢はわからない。

皆さんしばらくここで泊まるらしく、テント張り始めた。モンゴル

のゲルみたいなやつが4つ並んでる。1つは大きい儀式用？で、明日そこで男性衆のうちの4人が成人の儀式をするらしい。

エルフの成人は16歳で他の氏族は森の入口で簡易的なのをやるんだけど、この氏族は役職の関係で正式なのをやるらしい。

役職の関係ってのは、エルフの国で5年ごとに建国祭があつて靈樹も参加っていうか協力するんでそのうち合わせで奥まで来るというので、なんで関係するのかってえと、その5年に1度の周期が新成人がでる年とだいたいかぶるからだそうだ。まあ、エルフは長命種だからそう多く子が生まれるってわけではなく10年に一人生まれるかどうからしいんで居ない年もあるらしいし、ずれる人も居るらしいんだが、いなければ居ないで良いし、ずれてもせいぜい2、3年だから合わせるらしい。

難儀なことだ。

あゝ、エルフの皆さん寝ちゃったし俺も寝よ。ホントは睡眠もいらならしいけど。

第6話 問題発覚

side:キヨシ

今朝起きたらリンさんとトールズさんが興味深げに俺を見ていた。二人いわく

「長く生きてるからいろんなものを見ているけど、寝ている霊樹族の分霊なんて初めて見た」
だそうだ。

長に聞いたところ、普通の霊樹族は睡眠はとらないがこまめに分霊を戻すそうだ。みんなちよいちよい居なくなると思ってたんだがそういうことか。でも、俺 樹に戻れないしなあ…。

「おい、キヨシきいてたか？」

「えっ？」

しばらく、考えていたら星見^{ほしみ}から念話が来た。星見は俺と一番歳の近い(といっても10年差)霊樹で仲がいい。

周囲を見回すとほとんどの霊樹が集まっていた。どうやら話し合いが始まっていて、星見はそれをいつているらしい。イヤツだ、ホント。

「わりい、聴いてなかった。で、何はなしてんだ？これ」

「はあ、当人がこれかよ…。あんな、オマエ真名がわかってねえじゃん？けど今日の儀式で真名をいわんとならんらしい。」

「えー、聴いてねえよ。どうすんだよ？」

「それはまだ。霊樹^{いじゅ}側だけで決められねえし、エルフ呼んだとこ。」
「そっか」

はあ。真名がないのがこんなに大変だとは…。

あ、ちなみに「星見」は真名じゃなくて愛称。自分が相手より強い存在の場合、真名を呼ぶと相手を縛ってしまう事もあるので基本的に真名で呼び合うことはないらしい。だから人族とかエルフとかには名乗るための個人名や家名がある。それが霊樹の間じゃ愛称ってわけ。

ん、エルフたちが来た。どうなんのかなあ。

来たのはリンさん、トールズさん、男性衆が二人で、トールズさんいわく「成人済みの者だけで来た」とのこと。男性二人はケントとシユワルと名乗った。

長が簡単に問題と俺について説明すると、エルフ四人で相談したあとトールズさんから提案があった。

「我々エルフ族には まなざため 真名定 という儀式がございまして、ほとんどすべてのエルフがそこで真名を知ります。ですから、キヨシ様も受けられてはどうでしょう？ ちょうど、巫女もおりますし。」

そんな便利なのがエルフにはあるのかあ。でもなあ…

「『ほとんど』というのは？ それに霊樹族に効くんですか？」

あ、俺も気になったときいてくれた霊樹がいた。

「儀式を受けるのは五歳ぐらいなので、その前に自分で気づく者もいるのです。効くかどうかはわかりませんが危険はありませんし、他種族にも同じような儀式がありますから。」

と、今度はリーンさんが答え、「やらないよりは……」ってことで俺は儀式を受けることになった。

その後しばらく、段取りなんかの話し合いをして、今日やるはずだった成人の儀式は明後日に延期して、今日は夜、俺が儀式を受けることになった。

儀式をすると寝てしまつらしく結果は明日の朝だそうだ。その間に長たちは俺の代役を仕込むんだってさ。

儀式は魔術の一種らしいから楽しみだ。

第7話 真名定ノ儀

side: リーン

急いでキヨシ様のための儀式の準備をする。見習いの2人では手が足りず、連れてきた男の子たちの何人かにも手伝ってもらう。本当は良くないのだけれど、仕方ないわ。

まずテントの中に白い大きな布を敷き、中心に縄と清めた石で3ルウ四方の簡易結界をつくる。結界の角を東西南北に合わせなければならぬのが大変だけれど、ちょうど4人いる男の子にやってもらいましょう。そうすればサリサとミユラの手も空くし。

「では、男の子たちは縄をもって。サリサとミユラは道具の準備を。」

「「「「「はい」「」「」「」」

「トキは半歩右へ。…全員そのままおろして、石で抑えて……んー、よろしい。みんなありがとう。」

「巫女様に礼を言われるなんて…」

「いえ、当然のことでしたまでです。」

「はーい、でわー」

「……失礼します」

礼をしたら思い思いの返事をして帰っていきました。

「ただいま戻りました」

2人はやつと帰ってきたようね

「では準備を続けましょうか。2人はテントの周りを掃除して、終わったら川で身を清めていらっしゃい。」

2人が出たあと、呪墨（霊力や魔力を込めた墨）で陣を描く。結界の中心になるべく大きく。

陣を描き、神酒や守り刀などを並べ終えた頃には日がだいぶ傾いていました。

夕方には始めたいですし急がなくてはなりませんね。戻っていた2人に香を焚いて待つようにいつて楔ぎにいきます。

その後、服を着替えてテントに戻るとすでにキヨシ様がいらっしゃいました。

「キヨシ様、お待たせして申し訳ございません。」

慌てて非礼を詫びると

「いえ、構いませんよ。それと、敬語は止してください。俺なんてまだまだヒヨッコなんですから。」

と、居心地悪そうにおっしゃりました。ここまで変わってるとは思いませんでしたが、ふふっ、優しい子ですねえ。

「わかったわ。始めましょうか。」

「はい、お願いします」

「まず、神酒を」

分^彼霊の体では飲めないかもしれないと思っていたのですが…いい飲みっぷりです。

「では、これを持って陣の中心へ。いきますよ、いいですか？」

渡した守り刀を持ち、指定した場所に座った彼が頷くのを確かめて、呪式文を詠む。少し遅れてサリサとミユラがそれぞれ 迎神詞 と 退魔詞 を唱え始めた。

瞑想状態のキヨシ仰向けに寝かせる。

あとは明日を待つばかり、彼にはきつとよい名が与えられるのでしよう。変わってますが、素敵な子ですからねえ…

第7話 真名定ノ儀（後書き）

補足

祝式文：儀式用の陣を発動させるための呪文。ただの魔法陣の発動呪文と区別される。

迎神詞・退魔詞：祓詞のようなもの。補助魔法の一種で神職にしか使えない。

感想、意見、誤字・脱字の指摘などよろしくお願いします。

第8話 再びの”狭間”で

side:キヨシ

夕方俺は 真名定 の儀式とやらを受けるために大型テントに向かった。けれど中にはサリサさんとミユラさんしかいなかった。

「リーン様は着替えて戻られますのでこちらに座ってお待ちください。」

「あつ、はい」

ミユラさんに座布団（と思われるもの）をすすめられ、腰を下ろす。どうやらまだ早かったらしい。

はあ、にしても煙いな…香を焚いてるみたいだ。

しばらくして帰ってきたリーンさんだけど、帰ってくるなり頭を下げる

「キヨシ様、お待たせして申し訳ございません。」

「いえ、構いませんよ。それと、敬語は止してください。俺なんてまだまだヒヨッコなんですから。」

しかも敬語…

しきたりとかいろいろあるんだろうけど、俺のキモチ的に（元日本人としても）落ち着かないのでやめてもらった。わりとあっさり了承してくれてよかった。

その後、酒飲まされたり（いいのか？）、座りなおすのに正座して変な目で3人に見られたりしたけど、いよいよホントに始まるみたいだ。

リンさんたちは俺が首肯するのを確認して詠唱だろうか、何か唱え始める。さざ波のように満ちてくるそれを聞いているとだんだん五感が鈍ってきて、意識もぼんやりとしてきた。

やばいなあ、なんて思っているとグツと引き上げられるような浮遊感を感じ、気付けばこの前の”狭間”の応接セツトに座っていた。

「お久しぶりです。」

「えっ！？俺また死んだの！？」

至極当然のようにそんな声をかけ、自分の前に座る素晴^{死神}さんを見て大声を出した俺は間違っていないと思う。ホント、どうなってんだ？

「いえ、死んでませんよ。儀式による瞑想状態を利用してこちらに呼んだだけです。」

「呼んだだけって…、こっちは相当焦ったんだが…。まあ、いいや。んで、呼んだ理由はなんですか？」

「はい。実は山口くん…今はキヨシくんでしたね。きみの真名がなのはこちらの手違いみたいなものでして、原因は」

衝撃事実発覚って感じだな。長いから割愛するけど、簡単に言うと俺をあの世界に入れたら並行世界に追い出されて真名だけ落っこちたってかんじらしい。

んで、肝心の真名は破棄されたあとなんで新しいのをくれるらしく素晴さんが書類を探してる。

「ああ、ありました。これがきみの真名です。魂のデータから割り出したので適合率は90%以上ですよ。…読めたらここにサインを。」

シェニウス・ルテウシユリル・プラネット
境界を越える碧い風

受け取った書類の真名の欄に書いてあるのはまったく知らない文字と言えるのかもわからないシロモノだったけど、そんな言葉が自然と浮かんできた。

「発音はあってますね意味の方も大丈夫ですか？」

「あ、大丈夫です。」

どうやら声にも出ていたらしい。書類にサインをしてわたす。

「そつえば、まだ冒険したかったりします？」

書類を確認していた素晴さんが急に聞いてきた。そりゃしたいけど…

「いえね、きみ自身は冒険はできないんですけど、真名を交^{パス}わして契約をするか、真名を刻んだものをわたすと魔力の糸が繋^{パス}がって分霊が出せるんですよ。」

「ホントですか?!俺分霊だし行けますよね」

「行けますけど、きみが想像してるのとはちょっと違うと思うんですよ。今のきみは持ったり食べたりできる 半物質状態 だけど、魔力の糸から出るのはただの分霊だからホント見るだけですよ。」

「そう、です、か…」

「…そう気を落とさずに。そろそろ時間ですし……」

何の、と聞く前に目が覚めた。

テントを出て朝日を浴びながら力が満ちているのを実感する。良く考えたら外に出る術すべを知れただけでもめっけもんだよな。
よし!とりあえず長に報告に行くかな。

第8話 再びの”狭間”で（後書き）

補足

半物質状態 : 魔力の密度を物理干渉できるまでに高めた状態。
キヨシと長は常に発動しているが、魔力消費が激しい普通の霊樹は
しない。

感想、意見、誤字・脱字の指摘などよろしく願います。

第9話 報告

side:キヨシ

俺は今、長（本体）のもとに向かっている。儀式の成功報告をして、一応旅に出る許可をもらおうと思う。

長（本体）はシャレになんねくらいデカイ。幹の太さも俺の5倍はあるだろうし、高さもエルフたち曰く「森の外からでも1本だけ飛びぬけてみえる」らしい。俺も目覚めたからには樹齢百年は超えてるはずなんだけど、長は目覚めてかれこれ五千年ぐらいいは経ってるらしい。

つと、長のもとに着いたけど、朝早いしどうしたもんか…。

「のお、キヨシ。来るなり黙ってどうしたんじゃ？もしや…だめだったのか？」

悩んでると長の方から分霊になって（出てきて）くれた

「あーいや大丈夫でしたよ。（霊樹は寝ないんだっただな…）その報告と相談があつてきました。」

「では、山口清あらため境界を越える碧い風でs…」

…すっげ。なんだコレ…」

声にして真名を言ったとたん、風が吹いて木々がざわめく。チカラがあふれてきて五感もクリアになっていく。周りには赤やら青やらカラフルで透明な粒がほのかに光りながらふよふよと浮いている。黄色いのをつかんでしげしげと眺めていたら長が笑いながら声をかけてきた

「ふおっふおっふお、よかったのうキヨシ。すまんが呼び名は便宜上そのままじゃ。精霊も見えとるようじゃし、ほんによかったのう。そうじゃ、一応他の姿になってみてくれんか？」

「（これが精霊？）あつ、そうですね。忘れてましたよ。」

黄色をペイツと捨て、考える。

うーん、何がいいかな。やっぱ狼とかカツコイイよな。

よくイメージして…ってわかんないな。たしか犬みたいなかんじだったよな……

乏しい想像力を総動員していると俺の周りに白い粒が集まってきた、うつすらと光の膜で覆ってく。スルスルと目線が下がって四つん這いみたいな体勢になっていた。

「…犬かの？それは」

「狼のつもりだったんだけど…」

「そ、そうか。いや、まあ、明日はよろしくの。皆には今伝えるからの。」

「ああ、そっちはまかしてくれ！」

長が念話で連絡したのでみんなが集まってきた。けど、ようすがおかしい。

とくに女性は直視してくれない。

「よ、よかったねキヨシくん（ナニコレ、かわいすぎ）」

「ほんとほんと（うんうん、癒されるう）」

理由は最後に来た星見のことばでわかった。

「いやあ、よかったな！オレも肩の荷が……ってオマエなんてけものがた獣型
！？

しかもフサフサ。すげえかわいいじゃん。」

やって来るなり話し始めた星見のことばは結構痛かった…

そっいえば俺、狼（あくまで言い張る）のままだったな。…うん、
戻ろう。

さっきより早く姿が変わる。 あああ 女性陣から落胆の声が聞こ
えたのは気のせいに違いない。
気を取り直し長に向き直る。

「俺、儀式が終わってしばらくしたら旅に出たいんです。森の外を
見てみたいんです。」

「ぬう？なぜ…いや、どうやって森を出るといっくんじゃ？」

周囲がざわめくを感じる。

「それは……」

あ……………素晴さんのことなんて説明すればいいんだ？

第9話 報告（後書き）

主人公だいが抜けてますね（^ー^；）

（ ）内は伝えないよう思ってること、または、他の人との念話です。

内は念話でのハモリです。

次話は結論から入ると思います。

第10話 成人ノ儀（前書き）

「成人の儀式なんかどうでもいいよ」ってな方は読まなくてもギリ平気だと思います。

それでも「まあ、読んでやるか」ってな方、お付き合ってください。

第10話 成人ノ儀

side:キヨシ

ついに、エルフたちの成人の儀式当日だ。

あゝ緊張してきちまった…

えっ？”旅”の話はどうなってんだって？

あゝ、実は先送りになっちゃったんだよなあ。

いやね、俺も”お告げ”ってことで説明して、説得してみたんだけど「正しいかどうかもわからん、何よりお前はまだ目覚めて一ヶ月しかたっていない」ってなことを言われちゃってさ。こればかりはしょうがないだろ。俺だって、ものごころついて一ヶ月の奴なんか出歩かせねーよ。

ま、一応 儀式終わったらリーンさんやツールズさんに話通してくれるから、うまくいけばエルフの村は見れそうだ。

それよりも、だ。

儀式での俺のセリフが予想以上に多いんだよ…。一言三言かと思っ
てたら長いし、古文みたいな口調なんだよ…

あつ、始まる。

森の奥、少し開けたところの儀式用のテントの中 真名定 の時と

はまた違う陣が描かれている。その陣周りにはエルフたちと霊樹全員が輪になっている。

儀式用の衣装に身をつつみ、右手に短い錫杖をもったリーンさんが中央に進み出て「これより 成人の儀式 を執り行う」と厳かに宣言する。

リーンさんの「前へ」の声で今回成人する4人 エトキロ、レンシード、アレックス、キールが前に出てひざまずく。すると、リーンさんたち巫女3人（内見習い2人）が詠唱（仮定）をはじめ、陣が発動し4人を光の粒子が包んだ。それが晴れるとそれぞれ違った場所にタトウーのような一族を示す印が刻まれていた。4人が立ち上がり、エトキロが口を開く

「我ら、今此処に一族の真の一員たる証を示したり。」

さて、出番だ。

「然り。なれど汝ら、自らの足で歩み友と支えあい、その長き命を生きる覚悟はあるか。」

「「「「応!!」「」「」」

「なれば、汝らの門出を祝し、シェニウス・ルテウシュリル・プラネット霊樹がひとり境界を越える碧い風より 絆の一枝ひとえを贈らん。」

それぞれに小ぶりの枝が渡され、4人はそれを押頂く。そして、リーンさんが錫杖を大きく2度鳴らし儀式の終了を告げた。

あゝ緊張した。

…にしても、いくら通算百云年生きてると言っても、見た目16歳程度の俺があんなエラソーなこと言っているのか？新成人の気持ちを考えるとか本通りでも居たたまれないな。

ちなみに 絆の一枝^{ひとえ} っていうのは普通に霊樹（俺本体）の枝なんだけど、巫女であるリーンさんが切り落としたからわずかに 魔力^{パス}の糸がつながっているから良い魔法触媒になるらしい。んで、儀式に組み込まれた由来は「エルフの祖は森の民として、森の長たる霊樹に認められ、その枝を賜り村を興した。」という伝承だそうだ。

さて、昼は宴をするらしいからその時にでもリーンさんたちに”旅”の話をしてみようか。

第10話 成人ノ儀（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

リンさんの衣装は巫女服じゃなくて、弥生時代レベルのものなん
で卑弥呼イメージです。（実在したのかも不確かな人物のものを例
に出してすみません）

あと、錫杖なんかはキヨシの主観ですから、そう呼ばれてるわけ
はないです。

感想、意見、誤字脱字指摘などお待ちしております。

がしかし、エトキロとキヨシのやり取りはそれっぽいくしなかった
だけなんで、お手柔らかに（＾ー＾；）

第11話 酒の席（前書き）

お待たせしました。

11話です。

（：え？待ってない？そりゃ、失礼しました。）

第11話 酒の席

side：キヨシ

儀式用のテントにおかれた大きなテーブルには大皿に盛られた料理が所狭しと並べられている。今は午後3時ごろで、いよいよ宴の始まりだ。

ちよつと明るすぎる時刻な気もするが気にしない。なんてったって久しぶりのまともな食事なんだ。時間なんて全力で無視だ。

そりゃ、この体なら食わなくなつて死なないが習慣はそうそう変わるものじゃないし、感情というか基本欲求として腹がへる。けど、森の中だから調理器具はもちろん火すらない。動物を狩つて食べようかと思つたけどさすがに生はムリだし、食うモノと言えば木の実とか木の実とか木の実とか・・・んで、今日やつと食べる料理、全力で楽しみにして何が悪い！？……サリサさんが引いてるケド。……リーンさんとトールズさんと長が優しすぎる目で見てるケド。

「この世界を創りたもうた神々と精霊の恵みに感謝します。では、皆さんどうぞ。」

エルフと霊樹の全員がテーブルに着き、トールズさんの声で宴が始まる。

「この世界を」というのは「いただきます」みたいなもんなのか、リーンさんやエトキロたちエルフは各々に復唱してから手を付けている。

にしても、おいしいなあ。煮たり焼いたりしてるだけだし、味付けも

塩と胡椒と砂糖ぐらいだけど調理してあるだけでぜんっぜん違う。長たちが形だけしか口を付けてるだけなのもつたいないぐらいに

しばらくたって空いた皿が多くなってきて、酒も出てきた頃。日が沈み始め、テントの中も薄暗くなってきた。しまった。

すると、トールズさんが外からろうそくと燭台をいくつかを持ってきて空いた皿にセットした。そして、懷から指揮棒タクトのような杖を取り出し、Vを逆さにした下に点を打つAのような図形を描くように振り

「シ・クエノア」

と、つぶやく。すると、杖の周りに赤い精霊が集まってるうそくに放たれ……ろうそくに火がついた!?

「”おお。魔法だ!”」

おっと、思わず日本語でしゃべっちゃまった。

side: トールズ

暗くなってきたので 結印魔術 で火を付けると聞きなれぬ言葉が

聞こえてきました。声の方へ顔を向けるとキヨシと目が合いました。彼は霊樹ですがとても変わっていて、敬語を嫌いますし、寝るし食べるし、14、5の少年そのもので今年で365歳になる私にとつては子供や孫のようです。

ああ、今も好奇心で目をキラキラさせて、若いですねえ。

「どうしたんです？キヨシ。」

「あつ。初めて魔法らしい魔法を見たからびっくりして…」

「ああ、そうですか。森の中で見る機会もないですからね。これは結印魔術 といって、自分の魔力で印を描き、精霊の力を借りて発動させる一般的な魔術です。儀式などで使われる 陣魔術 を簡易化したものです。その分効果も小さいですが、使い勝手はいいのですよ。」

初めて見たというキヨシに 結印魔術 の説明を簡単にしたところ、思いもよらないことを言われました。

「あの、俺にその 結印魔術 ってのを教えてくれませんか？」

はて、どうしたものでしょう？

第12話 魔法と魔術と（前書き）

なかなか進めません。

しかも、主人公のキャラがぶれてるよーな…（；・ー・；）

第12話 魔法と魔術と

side:キヨシ

「あの、俺にその 結印魔術 ってのを教えてくれませんか？」

陣魔術 はムリそうだったから諦めてたけど 結印魔術 って手があつたな。小説でも出てたのになんで忘れてたんだろう？

あつ、あんまり唐突だったからかトルズさんが困惑してしまった。でもこれでやっと、俺もファンタジーらしいことができる！冒険はできないけどせめて魔法ぐらい使いたいしな。よしっ、是非とも詳しく教えろ

「ちょっと、それはできません。」

トルズさん……まさかの拒否。もしかして、門外不出とかなのか？でも、したらこんなところでつかはないだろうし、小説では誰でも使えるっばかったし…なんで？

「いえ、もとは人族の技術なので呟いてたような門外不出とかではないですよ。理由は…端的にいうと、あなたが”霊樹”だからです。霊樹は『分霊を作る』という一種の魔法を使っていますから、魔術を教えること、正確に言えば使えるようにすることはできません。すみません。」

呟いてたのか、俺。

というか、どうゆうことなんだ？とりあえず、魔法と魔術が違くて、俺自身が魔法だから魔術はできん、と…？

ファンタジーなこと

「へえー、分霊って魔法なのか。知ってたかあ？まあ、魔法使えてたんだからよかったな。キヨシ」

「星見…。俺が魔法でいろんなことがしたいんであって、魔法ならなんでもいいんじゃないの。」

「あー、でもオマエが教えてもらおうとしてたの魔術とかいわなかったか？魔法と違うの？」

「はあ、気になるなら聞けばよろう。」

「トールズ。できないならしかたあるまい、気に病むな。それよりわしらは魔法を使つてるとさえ思っていなかったんじゃないが、魔法や魔術とはなんなのじゃ？」

「長、ひとの念話を傍受しないで下さいよ。」

「俺も気になりました。できれば、理由の方も詳しくお願いします。」

「

「あつ、そうですか。魔法を知らなかったんですね。」

え、目がキラッキラしてんだけどヤバイスイッチ入ったか？

「まず、そもそも魔法というのは　「うちの長、魔法・魔術の話になると止まらないんですよねえ。お酒も入ってますし…半刻は続くかと」

リンさんからフォロー？が入り、トールズさんは自分の世界に入ってしまったようで話し続けている。長と星見はそっちを聞いているけど、リンさんが説明してくれないかな。

「私が代わりに説明しますと、魔法は”起きないはずの事”、火種も無しに火を灯すとかですね、を念を込め言葉にしたり、強く願う事で”起こす能力”です。魔術はその能力を持たない者が、理^{ことわり}を得て手順を踏み疑似的に魔法を行使するためにつくった技術です。前者が自分のなかの理に沿うのに対し、後者は外の理に沿います。なので魔法を使う霊樹の皆さんは魔術を使えません。」

んーと、「理」てのはよくわからないけど「関東の家電は関西で使えない」というようなことだろうか。でも、魔術が”疑似魔法”なら同じようなこともできるのはずだよな。

「じゃあ、魔法でなら俺も同じような事できるんスか？」

「それは…どうでしょう？霊樹が使っているのは 種族魔法 といわれるその種族の生態に含まれてしまってる特殊な魔法ですから。そのほかの魔法は使えるかわかりませんし、仮にできるとしても私たちは理論的な部分しか教えられません。」

あー、そっか。

やっぱ、俺自身が種族魔法だからその他魔法はできないのか…… 〇

r z

第12話 魔法と魔術と（後書き）

感想、意見、誤字・脱字など お待ちします。

第13話 挑戦と師事（前書き）

少々長めです。

文才のなさが前面に出た読みづらさになってしまいました。
（前からだるbyキヨシ）

第13話 挑戦と師事

side：リン

魔法も教えられないことを伝えるとキヨシくんはひどく落ち込んでしまつて…。

そんな様子を見て、トールズの話が終わるまでのもうしばしの間はそつとおいてあげようかと考えていたのだけど、キヨシくんは「こんせんと」やら「かんでんち」などのよくわからない言葉を呟いて、俄然やる気を取り戻してきているわねえ。

「どうs」 と、言う訳なんです！分かっていただけましたか？」の（どうしたの）です？キヨシくん。」

トールズの話もある意味丁度すぎるタイミングで終わった様。さて、当のキヨシくんに視線を向けると、決意を固めたように

「理論だけで構いません。魔術も魔法もできるだけ詳しく教えてください。」

と頭を下げました。

どういうことかは分からないけど滞在が長くなっちゃうわねえ。それに…

長の問いかけは完全に無視しちゃうなんて、あんなに熱弁を奮っていた長が眼中にないのね…

side:キヨシ

「理論だけで構いません。魔術も魔法もできるだけ詳しく教えてください。」

思い切って言ってみたけど、やっぱりだめなんだろうか…

ツールズさんとリーンさんどころか星見まで呆氣にとられてn「何言ってるの」的な目線を、……アイツ念話まで送ってきやがった。

「うるせー、俺なり思うトコがあつてだな」

「できない可能性が高い事はわかりました。でも、いろんな分野に諦めないで独学で高みに登った人がいる。だから、俺は可能性があるなら諦めたくない。あ…。というわけなんです。幸い俺には何千年っていう時間がありますし、ね？」

しまった、星見にも向けてたから敬語が途中はずれちまった…。でも、伝わったかな？ 少なくとも長やツールズさん、リーンさんをはじめ年長者の目には理解の色がある。…若干、夢を追う子供を見守るような雰囲気だけど

「そういうことなら、僕が教えましょう。」

返答がなく、そわそわしてきたところに意外なところから声がかかる。

「「え？ ケント（さん）？」」

俺はもとより、ちよつとのり気になってるっばかったツールズさん、ケントさんの隣にいたシュワルさんから疑問の声が上がる。ケントさんは見た目、20代で10人の中では1番さえない…目立たない風貌のエルフだ。彼が目立つ行動をとるなんて意外すぎる。

「キヨシさm「せめて“君”で頼みます、尊敬語も無しで」はあ…
本人がそう言うなら。」

とりあえず、キヨシ君はともかく2人は何驚いてるんですか。人族の魔術学院で講師やってたの知ってるでしょう。それにシュワ、隣にいるんだから雰囲気^{ウツ}で気付こうよ。それから氏族長、仕事があるんだから乗り気にならないでください。」

敬語はノーサンキューだけど、本物の先生だったとはありがたい。
でも何でやめたんだろ？ わざわざ聞くのも失礼か…

「あ、やめたのは講義しつつ研究にも全力投球して倒れたからです。
講義の方は定評がありましたから、手腕^{ウツ}の方は心配しなくても大丈夫ですよ。」

と、思ったら自分から言ってくれちゃったよ。

というかやめた理由が過労って、平気なのか？ でも、教え方にも自信がありそうだし、400年ぐらひは生きてくれるだろうし…

「じゃあ、気長によろしくお願いします。」

「うん、準備もあるし、しばらく後からになると思いますが、よろしく。」

「頑張るんじゃないぞ、キヨシ」

「よかったな。できるようになったら、オレにも教えるよな。」

・ ・ ・

そんなこんなで、長とか星見、リーンさんにも励まされ、みんなの杯のペースが戻った頃。

長とトールズさんと今後の話をしてたと思われるケントさんが、ふと疑問に思ったふうで

「そういえば、キヨシ君。魔法はともかく魔術は要らないんじゃないんですか？」

と、聞いてきた。長なんかも、そういえば…、みたいな顔だ。

「ああ、説明してなかったですね。

まあ、1番の理由は疑似的に魔法を得るためのモンならある程度、魔法の使用工程とか踏まえて理論ができてるだろうから、起きる原理だけじゃない部分を知れるかな、と思ったからです。それに奇跡的に使えるかも知れないじゃないですか。」

「ああ、後者はともかく、『魔法の使用工程を踏まえた理論』ってのは正しいかもね。ほかに？」

あ、なんか先生モード？敬語じゃなくなった。気が楽でいいけど

「はい。あとは…そうそう、魔法が本当に分霊^{コレ}しか使えなかったと

きに疑似的に魔術使えないか実験しようかと思って。」

「「「はっ?!」「」」

あれ?俺、そんなおかしいこと言った?

第13話 挑戦と師事（後書き）

… なんと文才のなさ

主人公のキャラブレよりリンさんの方が激しかったという、まさかの事態。

さらにモブだったはずのキャラが中心に出てきてしまうという、無秩序感。

どう收拾付けようか？

第14話 碧風式（前書き）

お久しぶりです！。

・・・見切りつけなくてください（ノー＞；）

第14話 碧風式

side:キヨシ

「範囲・対象指定 。 出力1/100 。 コード00A5
00-arr 発動。」

俺の魔力で囲われていた魔術練習用の的に炎の矢が当たり、的は一瞬で燃え尽きる。

「よしつ。」

「やりましたね、キヨシ君。これで下位〜中位の魔術は再現できました。魔力のロスも少ないですし、命中率もほぼ100パーセントですよ。」

「これも、ケントさんに手伝ってもらったおかげだ。ありがとう。」

ケントさんと共同研究を始めて20年、師事し始めてからだと30年、やっと俺は魔術^{もじき}が使えるようになった。

「ホントにすごいですよ。たった30年足らずで新しい魔法体系を作り上げてしまったんですから。 結印魔術 は国を挙げて100年近くかかったそうですよ。」

俺にとっては”やっと”でもケントさんにとっては”たった”らしい。でもまあ1つの技術を作り上げたんだからおかしくもないかもしれない。それにエルフは長命種だから寿命の割合からいって、人族の4、5年の感覚みたいだし。

でもやっぱ、いろいろあったよな。20年前にリンさんが引退してミユラさんが 大地の巫女 を継いだし、10年前には冒険者のシユワさんにあこがれていたトキが冒険者になった。

あ、トキはエトキ口の愛称な。トキとは、簡易契約もしたしい友達だ。魔力の系^{パス}を通じて念話もたまに来るし、俺が魔術もどきを使えるようになったから遠隔で援護できるようになったしな。

スロキアの 大地の氏族 の村に住むようになって30年弱。魔術体系できるまで、ホント長かった。

魔術と魔法の理論は5年で終わったんだが、実践に移すには森じゃ無理があるんで半物質化した分霊を 大地の氏族 の村に出す必要があった。んで、ケントさんと契約して半物質化できるようにしたんだが、それにまた5年かかった。

まあ、結局 一般に普及してる魔術は使えなかったし、 種族魔法 以外の魔法は退化してて使えなかったんだけど。

そこで、俺が最初に考えてた”分霊を使った疑似的な魔術（魔法）”をケントさんと研究し始めた。

考えた”分霊を使った疑似的な魔術（魔法）”は2種類。1つ目は分霊で精霊もどきを形成して、使役する方法。2つ目は魔術理論を元に”魔術を使える”という概念を一分霊（俺自身）に上書きして無理やり回路（つまりは”理”）を創り出す方法。

1つ目は割と簡単に出来たんだけど、無属性と木属性（土の派生）しか出せずイマイチな結果だった。

2つ目は…出して約5秒で消えた。ケントさんに魔術で「解析」してもらったところ、魔法の回路が残っているところに魔術の回路を書き込んでしまったので大きな負荷がかかってしまったらしい。

だが、これで諦める俺とケントさんではない。魔法の回路が退化した部分を特定し、そこを埋める理論を研究することにした。これが10年前。

研究の結果 霊樹には魔法の”言霊”や 結印魔術の 音や印にあたるものがないがために「事象の実現」ができないことが分かり、試行錯誤の末にできた今の形式を分霊に組み込んだ。

この形式は『範囲・対象指定、使用魔力量の指定、属性と形状の決定』を宣言して発動する。範囲・対象指定は魔力であたりを付け、使用魔力量の指定は”生命維持に使わないの魔力”分の”必要魔力量”であらわす。属性と形状の決定は前世の『カラーコード』を参考に作った、属性コード と英単語の頭三文字であらわしている。

「連名で論文まとめたので媒体と一緒に、以前勤めていた学院に送りますけど、名称はどうします？」

そうそう、この魔術 俺用だったはずなのになぜか媒体 俺（本体）の一部をもつと他の種族でも使えるようなのでケントさんと連名で発表することにしたのだ。

「んー、決めていいんですか？ …… そうだな、 エルフ魔術：碧風式 とかどうでしょう？」

「エルフというのはあまり関係ないし、 碧風式魔術 でいいでしょう。真名からですよ。」

「あはは、主張しすぎですかね？」

「いえ、もっと誇っていいと思いますよ。 …… っと書けた。じやあ、今度は君が移動するための研究でもしますか？ したいんだよね、冒険？」

憶えててくれたんだ！

「さすが、ケントさん。よろしく願います！」

第14話 碧風式（後書き）

属性コード について

6桁で左から光 闇 火 風 水 土。それぞれの強さを16進法の0～Fで表す。かけ合わせもあり、その場合はどちらかが補助か、派生属性

「000000」は無属性。冒頭に出てきた「00A500」は火の派生で炎属性。

第15話 建国祭の準備と氏族の思惑

side:キヨシ

さて、ケントさんはああ言ってくれたけど、どうしたもんかなあ。
現状 旅するならケントさん同伴でないとかだ。

なにせ今、俺が動けるのもケントさんの周囲1kmの範囲だけだし。
それだつて、真名を交わして特殊な書面で正式な契約をしたからだ
もんな…。

「…となると、やっぱり（やはり）契約の強化かなあ（ですか）
……」

どうやらケントさんも同じようなことを考えていたらしい。
けどこれ以上使用魔力が多くなるとなあ…

「契約強化したら維持も大変になるし、ケントさんの負荷が大きくなるから無理ですよ、やっぱり」

「そうだね、維持も馬鹿にならない量になるし…すみませんね。キヨシ君」

「謝らないでくださいよ。魔術教えてもらったり、こっちが無理言ってるんですから。」

契約は維持にも魔力を使う。ケントさんの魔力量だと強化したりしたら、魔術が使えなくなってしまう。そんなことになったら、申し訳なさ過ぎる。

うーん、トキは俺と正式に契約できるほど霊位（存在の強さを魔術

用語でこういうらしい。」が高くないしなあ。それか、契約じゃないけども俺の魔力をどうにか送れば…

「あ！ケントさん、呪札の強化は？」

呪札は 魔力^{パス}の糸 を繋ぐための札で、自動で魔力供給するときなんかを使う。自分より霊位の低い、動物なんかに貼ると使役できるらしい。

「あ、それはいいかもね。紙のじゃ分霊を作れるほどの魔力は送れないけど、材料を変えれば強度が上がるから……やってみましょうか。」

「ケントもキヨシ君も、盛り上がってきたとこ悪いんですが今年の建国祭についての話しあいが始まるんで来てください。」

あ、今年は建国祭の年だったか。俺も霊樹族の特使として出てんだけど5年前は話しあいなんてあったっけか？

side: トールズ

”霊樹様が動けるなら首都で大々的に建国祭をやろう” そんなことを首都の 太陽の氏族（政治を司る）が言いはじめ、今年はいに抑えきれず段取りすら全体で決めることになってしまいました。

話しあいは 大地の氏族 領でやることになり、建国祭3か月前の今日、各氏族の代表が集まったのですが、 太陽の氏族 の長の息子で今回の代表のジユネーヴが「当人を呼ぶべきだ」とか何とか言いはじめました。どうせ、キヨシを抱き込みただけでしょうに。他も同じような考えのようで、キヨシが出てこないことには始まりそうにないし、従うほかなさそうです。

「こんなことであの子を煩わせたくないんですが…」
キヨシ君のもとに行くのも気が重い。

この時間なら広場でケントと魔術実験でもしているでしょう。．．．と、やっぱりいましたね。なにか話しこんでるようですね．．．まあ、ケントも連れて行けば露骨には勧誘しにくくなるでしょうしケントも連れて行きましょう。

「ケントもキヨシ君も、盛り上がってきたとこ悪いんですが今年の建国祭についての話しあいが始まるんで来てください。」

「あ、はい。」

「僕もですか？」

「まあな、ちょっと急いでください。」

先に歩き始めると、追いついてきたキヨシくんが首をひねります。

「話しあいつて、前回もありましたっけ？」

「いや…「ああ、首都でやるからじゃないですか？」…そうです。」

詰まっていると、すでに察していたのかケントが言ってくれました。ちょうどいいですし、相談しておきますか。

「ケント、どうやら 太陽の氏族 を筆頭にキヨシを抱き込もうとしてるらしい。魔術演出担当ってことで君を紹介するからキヨシのフォローをしてくれるかい？」

「ふう、霊樹の恩恵がほしってところかな？…わかりました。」

「へえ、やっぱり交通の便悪いですもんね、ココ。」

「「あはは…」「」

当人がかなりのんきなのが心配ですね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7718w/>

えっ！？冒険できないんですか？

2011年11月23日21時56分発行